

守  
破  
創  
対談

日本のゴルフ界を支え続け、今年プロ生活50周年を迎えるプロゴルファーの青木功氏。対する岩田規久男副総裁は、アカデミックの世界で存在感を放ってきた経済学者。一見「異色の対談」だが、世界を意識し続けてきた同年齢の二人だけに、まるで旧知の友のように話は盛りあがった。



日本銀行副総裁

# 岩田規久男

Kikuo Iwata

1942年東京都生まれ。1966年東京大学経済学部卒業、1973年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了、同年上智大学経済学部専任講師、1976年上智大学経済学部助教授、1983年同大学教授、1998年学習院大学経済学部教授、2013年3月日本銀行副総裁就任。



プロゴルファー

# 青木 功

Isao Aoki

1942年千葉県生まれ。我孫子市立我孫子中学校卒業後、東京都民ゴルフ場などでキャディーとして勤務。1964年プロ入会。1971年関東プロゴルフ選手権で初優勝。1976年初の賞金王、翌年の2位を挟んで、1981年まで賞金王を連続で獲得（通算5回）。歴代11人目となる日米欧豪の4大ツアーのすべてで優勝。1980年全米オープンで記録した2位の成績は、今も日本男子によるメジャー大会での最高位。2004年日本人男性初の世界ゴルフ殿堂入り。2008年紫綬褒章受章。2013年日本プロゴルフ殿堂入り。生涯通算では85勝（2014年1月現在）。

## 完成と思えば成長なし

### 師匠の技を「目で盗む」

**岩田** 二人とも昭和十七年（一九四二）生まれの同い年ですから、肩の力を抜いてやりましょう。

**青木** そのほうが僕も安心してしゃべれます。かしこまってやるのは苦手なので……。

**岩田** 日本銀行というと、かしこまったイメージになりがちですが、青木さんは日銀にどんなイメージをお持ちですか。

**青木** 初めて日銀に来ましたが、何か重厚な雰囲気を感じます。ここが金融の中心で、僕の持っているお札がここから来たのかと。

**岩田** そうおっしゃる青木さんは、長年ゴルフ界の中心です。賞金王五回、日本、世界でゴルフ殿堂入りもされています。最近では六度目のエージシュート（注1）を達成されています。

**青木** ゴルフは生涯現役。実は僕は、今年の六月一日でプロ生活五〇年になります。

**岩田** では、プロ半世紀を振り返ってみて。

**青木** ゴルフとの出会いは、中学生のときにキャディーをやったことがきっかけです。就職先もゴ

ルフ場でした。お世話になってい  
た林由郎さん(注2)が、六一年  
の日本プロゴルフ選手権に勝って  
三〇万円を獲得しました。当時だ  
と総ヒノキの家が建つ金額です。  
それで、よし、オレもやってやろ  
うとプロを目指しました。

**岩田** ゴルフの技術は林プロに  
習ったのでしょうか。

**青木** 習ったというか、師匠の技  
術を「目で盗め」ですよ。そもそ  
も日中はキャディーの仕事をやっ  
ていますから、教えてもらう時間  
もなかったです。

ゴルフにも基本はあります。で  
も、それだけではダメ。大事なの  
は応用力。人によって体つきが違  
いますから、グリップやスイング  
も一人ずつ違ってきます。試行錯  
誤で自分のスイングを見つけてい  
かないと。

**岩田** そうですか。私が取り組ん  
できた経済学では、教科書や先生  
について基礎理論を習得するところ  
からはじまります。経済学のよ  
うな社会科学の世界は、共通の土  
俵をしっかりと持たないと先に進ま  
ない面が大きいので、ゴルフのよ  
うな競技の世界とは随分異なります  
ね。ところで、「目で盗む」とおっ

しゃいました。一瞬の動作をど  
うやって盗むんですか。

**青木** 動体視力が良かったです  
から、とにかく集中して見続ける。  
それを頭の中で再現するんです。  
日中に師匠のスイングを盗み、早  
朝などの空いた時間に練習をし  
ました。一日も休まず、ゴルフ漬け  
の生活を四、五年やって力をつけま  
した。教わったものよりも、自分  
で覚えたほうが絶対に強いです。

**岩田** 私は長年教壇に立ち多くの  
学生を育ててきましたので、教師  
の役割への信念として「教え導く  
人がいてこそ学ぶ人も育つ」とい  
う思いが強くなります。

しかし、どういった分野であれ、  
青木さんのように自分の技術で  
もって勝負するレベルまで高まっ  
ていくと、やはり「個」の主体性  
がより強く意識されてきますね。

とはいえ、誰かコーチングする  
人がいないと、遠回りをしたり、  
壁にぶち当たったりしがちな気も  
しますが。

**青木** 確かに、自分で覚えた  
言っても、自分ひとりです上手く  
なったわけじゃないんです。プロ  
になって数年は、軸足がぶれて  
シヨットが曲がる癖がありました

た。飛ばそうとして手首をひねる  
とますます曲がる。そこで中学の  
同級生の鷹巣南雄プロ(注3)にス  
イング改造を手伝ってもらいまし  
た。クラブに手を縛りつけて、一  
カ月以上、毎日千発は打ち込みま  
した。これはゴルフ人生の転機と  
なりました。鷹巣プロがいなけれ  
ば今の青木功はいないですね。

**岩田** 青木さんは人との出会いに  
恵まれていますね。ほかにもたく  
さんの方に支援されています。こ  
れは青木さんのオープンなお人柄  
のなせる業のような気がします  
が、いかがですか。

**青木** 僕はいつも思ったままに  
行動してるだけなんです。ゴル  
フに対して真面目なのでそれが良  
かったのかも知れません。いつか  
やろうじゃなくて、やるときは今  
すぐやる、とことんやります。

結果が出るようになって『あの  
人たちのおかげだな』とつくづく  
思うようになりました。一人の世  
界じゃないということですね。

### 直感と「アドレナリン」で 勝ち取った全米ツアー初優勝

**岩田** ところで、プロでのご活躍  
を伺いたのですが、日米欧豪の

世界四大ツアーすべてで優勝され、  
通算八五勝と偉大な記録を残され  
ています。その中でどれが一番記  
憶に残っていらつしやいますか。

**青木** それぞれ思い出があります  
が、一番は八三年のハワイアンオー  
ブンですね。日本人初の全米ツアー  
初優勝です。

あのときはトップタイでパー5の  
最終ホールまでいったんですが、一  
打目も二打目もミスしてラフにそれ  
た。一方、トップで並んでいた相手  
は四打で上がった。そこで僕は三打  
目を直接入れて勝ちました。

**岩田** 追いつくのが精いっぱい  
の状況で逆転勝ちとは、まさしくミ  
ラクルシヨットですね。

**青木** ピンまで残り一二八ヤード。  
イメージしていたのは、まずグリー  
ンに乗せて、ワンパットで沈めて何  
とかプレーオフに持ち込むというシ  
ナリオです。パットには自信があり  
ましたから、グリーンに乗せられる  
かがポイントでした。

勝利を決めたシヨットでは、キャ  
ディーの助言を聞かず、迷わず飛  
距離の出ないピッチングウエッジ  
を選びました。この場面は通常な  
ら九番アイアンです。手前にバン  
カーがありましたから。ですがあ

(注1) ゴルフの「ラウン  
ド(一八ホール、パー  
七二)を自分の年齢以  
下の打数でホールアウト  
すること。

(注2) 戦後復興期の日  
本ゴルフ界を支えたプロ  
ゴルファー。引退  
後は解説者、指導者  
として活躍。文部大  
臣スポーツ功労者顕  
彰など受賞。

(注3) プロゴルファー。  
通算六勝。二〇〇八年  
から杉並学院ゴルフ部  
監督。

の瞬間「九番だと行き過ぎる」と思って、普通は届かないピッチングウエッジを選んだんです。三打目、僕がクラブを抜いたら、キャディーは「オー、ノー」と言いましたよ。

**岩田** ギリギリの局面で、普通じゃない選択をした。どうしてそう判断したんですか。

**青木** プロとしての勘です。アドレナリンが出ていました。昔でいったら「火事場の馬鹿力」です。国内では何回か勝っていましたから、勝つときのアドレナリンの出方を知っていました。ですから、九番ではオーバーすると分かったんです。

**岩田** 大事なジャッジメントをするときのプロの頭の働きは、分析とか計算よりも、その瞬間の直感、身体感覚のようなもので分かっってしまうわけですね。確かに誰かに教えられるものじゃない。才能や経験のほかに、練習の賜物というのでしょうか。

**青木** そうですね。オレはこれだけやったら負けのわけない、と。バッティングに自信があったと言いましたが、なぜかといえは、それだけ練習したという自負があるからです。キャディーをしていた研修時代は、誘蛾灯を頼りに夜遅くまでバッティングを練習しまし

た。夜警の方に「寝られないから早く帰れ」と言われたりしたものです。結局、負けず嫌いなんですよ。だから練習するんです。

それと気持ちの強さも大事。勝つにつれて自信がついて、欲が出てきました。「平常心」とよく言いますが、平常心では物事は成し遂げられませんよ。「絶対に勝つぞ」という気持ちが必要ですね。

**岩田** チャレンジすると失敗もあるんで「失敗するリスク」ばかり意識しがちです。しかし、実は「何もしないリスク」もあるんですよ。両方のリスクを公平かつ冷静に考え抜いたうえで、必要なチャレンジは果敢に行う。何事にもこうした姿勢が必要だと思います。

**青木** 僕は常にプラス思考ですから、失敗しても気にしません。ゴルフの神様が「おまえ下手だからもう一回やれ」と言っているんだなど、そんなふうに思いますね。だから、重要な場面でも思い切り勝負できるのかもしれない。

それと面白いもので、ミスをする、と、どうしてミスしたんだろうと考えると練習するんです。ミスするからうまくなるんです。  
**岩田** 経済学では「アニマル・スピリット」と言って、リスクを取っ

てチャレンジする企業家精神こそがイノベーションを生み出して経済を発展させる、という考えがあります。青木さんには企業家のアニマル・スピリットに通じるものを感じます。

### 海外では言葉よりも 気持ちでコミュニケーション

**岩田** 最近は世界に出る日本選手も多くなりました。今でこそ英語を話せる日本人選手も増えました。先駆者としてやっておられた青木さんは言葉の壁はなかったのですか。

**青木** ないですね。こっちは日本語、向こうは英語で話しても通じますよ。要は、英語をしゃべれないだけじゃべりたい、だから一生懸命片言でもしゃべっているんだという気持ちを相手に分かってもらおう。ボディランゲージもあるし、英語でも日本語でもどっちも話しかける。そうすれば相手と友達になれます。ゴルフの試合もやりやすいと思います。

**岩田** 学者の世界では、いくらいのことを考えていても、相手に伝わらなければ何も考えていないのと同じです。外国人に考えを正確に伝えることには特に意を用います。

スポーツの世界でも言葉の不由さが多少は影響しそうですが、青木さんのように英語をストレスとして感じないということはとても大切なことですね。

**青木** ゴルフのスコアとは関係ありませんから。それに「火曜日にうちでバーベキューやるから来るかい？」こんな誘いに乗れたらすぐに友達ができます。英語ができなくても、一緒にビールを飲みながら適当に「ふんふん」なんてやっておいて、「じゃあな」と帰ってきたっていいんですから。友達になればリラックスできるし、知らないうちに言葉も覚えますよ。

若い人たちに言っておきたいのは、海外にいても、日本人同士の集団だと、そういう誘いもないですから日本人だけで固まっていたらダメです。

### 「この道しかない」と 信じることはじまると

**岩田** 野球の川上さん(注4)は、昔「ボールが止まって見える」と言っていました。ゴルフをやっている、そういう心境になりますか。

**青木** ゴルフが全部分かったとは思いませんが、自分でも「よしっ」というときがありますよ。

(注4) 川上哲治。プロ野球選手・監督、野球解説者。現役時代から「打撃の神様」と言われ、戦時中から戦後におけるプロ野球界の大スターとして活躍。(一九二〇～二〇一三)。



大事なことは理屈じゃなくて、体で感じるかどうかです。試合をやるコースでも、レイアウトを一回覚えたら、朝ばつと起きたときに「きょうは西風だ。何番ホール、何は難しい」と、自分が鳥になったように、上から全部見えています。

**岩田** そういのはやっていっているうちに会得するものなんですか。努力してもそこまでの能力を得られないものじゃないと思いますよ。

**青木** 最後は動物的な勘ですよ。努力してもなれない人もいれば、努力しなくてもなれる人もいます。ただし、努力しないうでなつた人は頂点はなかなか難しいでしょう。努力した人は、どうやって自分がここまで来たか分かってますから、一回勝てば頂点に行くのが早いですよ。

**岩田** 青木さんは後進の指導にも力を入れて聞いて聞きます。若者世代に対して伝えておきたいことはありますか。

**青木** まずは「この道しかない」と信じてること。僕にとつてはゴルフ。ゴルフの神様が「おまえにはこれしかないよ」と言ってくれた。ゴルフは天職なんですよ。

それと、どのスポーツでも自分が一番になりたいという気持ちで常に持っていなければダメです。簡単にあきらめない。僕は八五勝していますが、二位が二〇〇回ぐらい。悔しきは喜びの三倍ぐらいありますよ。

**岩田** ナンバーワンになるためには、ナンバーツーが何回もあるという事ですね。

**青木** ナンバーツーを何回か経験したことによって、もう一つ上のナンバーワンが狙えますから。人生苦もあや楽もある。苦労しないで一人前になれるということはあり得ないですよ。

その苦労を人に言ったからといって人は助けてくれません。認めてはくれるかもしれないけれども、助けてはくれません。でも、なせばなるし、ならなければ「もう一回努力すればいいや」という

ことです。

## 「体・技・心」で生涯現役に挑む

**岩田** 五〇年のプロ生活では、スランプの時期もあったんでしょうか。

**青木** 勝てないという意味でなら、六五歳で一回勝っているけれども、六〇歳ぐらいからずっとそうなのかも知れません。でも、常に前を向いてますから、あまりそういう意識を持ったことはないですね。

**岩田** 幸せなゴルフ人生ですね。ゴルフはメンタルなスポーツだと言いますが、余り悩みはなかったみたいですね。

**青木** 好きなゴルフをやっていたら悩みはないし、そもそも悩んでいる暇がないですよ。

メンタルが大事とよくいいますが、僕は体がすべての基本だと思えます。体が元氣じゃないと、技も身に付かないし、やりたいこともやれない。やりたいことができてはじめて心も充実すると思います。

**岩田** 青木さんは「心・技・体」じゃなくて、「体・技・心」。「肉体を鍛えることで心も鍛えられる」ということですね。そのために何か心がけていることはありますか。

**青木** 怪我が一番怖いので、ここ二、三年すごく用心深くなりました。若いときだったら一カ月で治る怪我でも、今は三カ月たつても治りません。

日頃から体調維持のために肩甲骨を動かしたり、腹筋をしたり、朝汗かくほど散歩したり、いろいろやっていますよ。僕はゴルフと一緒に生活していますから。

**岩田** プロ生活で何かやり残したこと、これはやり遂げたいということはありませんか。

**青木** ありますよ。もつとうまくなって、もつと勝ちたいです。僕の場合には進むべき道は一つしかないんですから。ゴルフはまだまだ分かりません。

**岩田** 「完成した」と思っていないということですね。

**青木** 僕の気持ちの中では、「完成と思えば成長なし」。これ以上先へ進まないということですから、成長しないでしょ。

だから、「おまえ幾つまでゴルフやるんだ？」と聞かれたら、答えは「決めてない」。幾つになつても挑戦心を忘れたくないです。

**岩田** 我々世代もまだまだ頑張っていきたいですね。今日はどうもありがとうございました。